香りの時間

中井英夫

香りの時間

中井英夫

大和書房

香りの時間
一九八一年三月三〇日初版発行
一九八一年五月一五日二刷発行
著　者　中井英夫　©1981
発行者　大和岩雄
発行所　大和書房
東京都文京区関口一―三三
郵便番号　一一二
電話（二〇三）四五一一
振替　東京六―六四二二七
本文印刷　信毎書籍印刷
製　本　ナショナル製本
1095-051330-4406
装画　建石修志
装幀　高麗隆彦

香りの時間／目次

Ⅰ 香りの時間
待つ 5
うなだれる 9
訝しむ 13
溶ける 17
礙げる 21
狂う 25
記憶する 29
Ⅱ 白銀の暗殺者
電気地獄草紙 35
暗号異聞 41
禁じられた扉 45
偏愛的俳優(スダア)列伝 49
光と影の彼方に
幻影の都市 62
私の都市論

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

地下鉄幻想　67
時間の闇　73
私の文明論
香りの言葉　78
白銀の暗殺者　84
香りの源泉について
立野地蔵尊由来　94
流刑地にて　98
ホモ・セクシュアルについて
男が化粧するとき　111
現代の「いき」の構造　116
「新青年」の変遷　120
恐山の異臭　133
幻町の住人になるには　137
建石修志の不在・おゝ厳格なる数学よ　143
中井英夫　建石修志

Ⅲ 黒鳥の呟き
白鳥扼殺者 153
黄いろい涎(よだれ) 158
紫匂う舞台 163
蒼ざめた月曜 168
青雲の志とは 173
薔薇と狂気と 178
金と銀と銅 183
緑いろの血 188
茶の犬の墓 194
橙果親しむ候 199
紅葉(もみ)づる庭で 204
黒鳥の死まで 209
あとがき 214

香りの時間

I

香りの時間

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

待つ

私にとってワインだの宝石だの、あるいは薔薇だの香草だの金貨だの、なにがしか人に珍重されるものは、生得この身にそぐわぬという思い込みがあって、それらは憧憬の対象でこそあれ、滅多に現実として傍らにあったことはない。時計にしてもそのとおりで、大正時代の蒐集家である高林兵衛氏の所蔵に係る、ダイヤやルビーを鏤めた旧大名の売立品とか、いかにも楽しげな緑川洋一氏のコレクションを写真でみると、しんそこ溜息をつきはするけれども、自分ではまだ、ただの一度も身近かに蒐めようと試みたことはない。時計の魅力、時計の不思議さは、すべて物語の中だけにあり、それはそれで充分に私を慰めてくれた。

最初に大時計の戦慄を齎してくれたのは、昭和五年「講談倶楽部」に連載された、江戸川乱歩の『魔術師』である。当時小学二年生だった私は、父の寝室に置かれていたその雑誌を、息を詰めて貪り読み、大時計の針そのものが緩慢なギロチンの刃と変って、徐々に徐々に一郎の首に喰い込んでく

る新しい死刑法に胸をとどろかせた。ポオの『ある苦境』からの写しとは知らぬ私にとって、それは何という奇抜で残忍なトリックだったことだろう。

大森の山の手にある玉村宝石商の本邸に煉瓦造りの西洋館があって、店の屋根にあった時計塔が大震災で落ちたのを機会にこちらへ移す。殺人犯の予告らしい白い紙がその文字盤に貼られているのを見た一郎は、そこに登ってネジ穴に見立てた明り取りの丸窓から首を突き出し、何とかその紙の字を読もうとする。長いあいだ苦心しているうちに、長さ一間、巾一尺もある鋼鉄製の針が首の肉を圧迫し、頸骨は鳴り、気道は塞がれる。そして最後の瞬間に一郎は紙に何と書かれてあるかを知った。

〝午後一時二十一分〟

それはまさに死刑執行の時間だったのである。

時計塔というものも、いまは絶えて見当らないけれども、平野光雄氏の著書によれば、大震災までは小林、京屋、小島、吉沼といった大手の時計店には、いずれも評判の大時計が飾られていたというし、少なくとも戦争まではそれは都会のシンボルのように馴染み深いものだったから、このトリックには息を呑む迫力があった。

この趣向をもじったのかどうか、昭和十二年から十三年にかけて「新青年」に『魔都』を連載した久生十蘭は、その末尾に主人公を服部の時計台にぶらさげ、垂れた頭はⅡのところ、爪先はⅥのところで、二時三十分という絞首刑の時刻をあらわすという恍けぶりを見せている。久生好みの死体で、

上等のタキシードを着せ、エナメル靴を穿かせ、胸のボタン穴には一輪の花を差すという念の入れようであった。

ペダントリーの迫力では、小栗虫太郎の『黒死館殺人事件』に及ぶものはない。臼杵耶蘇会神学校以来の神聖家族といわれる降矢木家――それもボスフォラス以東にただ一つしかないケルト・ルネサンス式の城館に、四人の神秘楽人がクワルテットを形成し、その第一バイオリン奏者グレーテ・ダンネベルグ夫人が毒殺されたとなれば、この館には甲冑武者も大階段もあって不思議はないが、一際生彩を添えているのは古代時計室の存在である。

……それには、カルデアのロッサ日時計やビスマーク島ダクダク講社の棕櫚糸時計。水時計の類には……

といった調子で書き出され、シャビエル上人の腸丸を童子の片腕に収めたオルゴール時計に及ぶ絢爛さは、世界にも比を見ない知識の淫楽であり、精巧を極めた一大タペストリーを眺める思いがする。しかもそれが昭和九年の「新青年」に連載されて喝采を博したとなると、当時のメンズマガジンの水準の高さはおどろくべきもので、

……斯うして、メディチ家の血系、妖妃カペルロ・ビアンカの末裔、神聖家族降矢木の最後の一人紙谷伸子の柩は、フレンツェの市旗に覆われ、四人の麻布を纏った僧侶の肩に担がれた。そして、湧き起る合唱と香煙の渦の中を、裏庭の墓穴をさして運ばれて行つたのである――閉幕。

という巻末までくると、何回でも痛いほど手を叩きたくなる。四十数年も前にこれほど格調高い探偵小説があったというのに、どうしていま、われわれの周りには、暴力とセックスが氾濫するだけの低俗ミステリーしかないのだろうと嘆いてみても始まらない。月日は流れ、私は残る、だ。

龍舌蘭の陰なる時計職人はま白き鼠族の歯をもてるかも
こじあけし時計のうちらに小機械薄荷みじろぐさまにうごきゐつ

葛原妙子のそんな歌をくちずさむとき、香り高い時間というものも稀れには訪れてくるものだと、ただ待つほかに出来ることはないのだから。

待つ、だんだん衰える、見守る。
wait, waste, そして watch.
……

うなだれる

父親が分類学者だったせいでもないだろうが、百科事典の編纂に携(たずさわ)り出したおかげで、いまもって分類となると胸をときめかせずにいられない。正確な分類は、事物の匿された本性と属性に近づくことで、それらの体系が朧ろげにでも浮かんでくれば、それは他ならぬ創造者の真意を知ることになるからだ。といってこれまでのところ出来たのはコンピューターを用い、百万ほどの項目を目的に添って、自在に並べ替え配列させるシステムで、専門家を含む数人で十年をかけ四年前に完成させた。むろんこれは高速漢字プリンターを用いて誰にでも判読できるようにしたもので、成果の一部は小学館版「万有百科事典」の索引として三年前に発売された。

のっけからいささか固苦しい話になったのは、きょう四月十二日の毎日新聞朝刊に、

〝コンピューター本体が漢字の処理を自由に〟

という見出しで、富士通が世界初のシステムを開発して売り出した記事が一面に出ているためだが、

いささか説明不足な内容が気になった。見出しにはまた、

〃「安藤」と「安東」も区別ができます〃

などとあるが、そんなことは当然で、問題は漢字データの入力である。漢字読み取り装置そのものは早くから研究され、それなりの成果もあげているが、コンピューター本体の処理能力に較べてインプット・アウトプットののろまなことといったら信じられぬほどだから、このシステムも実物の説明なしでは何ともいえないが、どんな形でもホイホイと右から左へ処理してくれるのではないことはむろんであろう。そこには必ず手作業という辛気臭い・うろんな・湿った・不正確な・効率の悪いエトセトラがつきまとう筈だが、実をいえば私もそれが好きでたまらないというのが本当にいいたいことなのである。

これは物書きの性というより、どこかしら人間本来の業を思わせるところがあって、たとえば百科事典でいえば、もう立項カードなどというものは要らないんだ、データバンクから医学なら医学、美術なら美術の必要項目だけを取り出し、むしろ周辺との関連を重視してくれと口を酸っぱくしていったところで、それは誰の耳にも届きはしない。担当者は黙々として手なれたカードを一枚また一枚と記し続け、うつむいたまま顔もあげないというのが実情であろう。

なぜなら、その作業をしているときだけ、心は本当に安らぎ、知識への信頼と交感が果される気がするからだ。ナノセコンドか何か知らないが、コンピューターがあっという間に吐き出す項目表など、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com